



京都大学
KYOTO UNIVERSITY

総合人間学部／人間・環境学研究科
Faculty of Integrated Human Studies / Human and Environmental Studies

No.

65



2020.10

総人・人環 広報

特集 新任の先生方より

着任のご挨拶	仁井田 千絵.....	2
没頭できる何かを	萩生 翔大.....	3
着任のご挨拶	堀口 大樹.....	4
理論と実践の間で	柳瀬 陽介.....	5
文献と地域社会から学ぶ	徳永 悠.....	6
めぐりめぐって、帰る	熊谷 隆之.....	7
京大を再読する	合田 典世.....	8
あみめ.....	永島 明子.....	9
中途半端の先へ.....	石村 豊穂.....	10
令和元年度総合人間学部卒業論文・卒業研究題目一覧.....		11

新任の先生方より

着任のご挨拶

仁井田 千絵

(総合人間学部 人間科学系)

人間・環境学研究科 共生人間学専攻)



初めまして、人間・環境学研究科に准教授として着任しました仁井田千絵と申します。専門はアメリカの映画・メディア史で、同じ講座の木下千花先生と共に、主に映画学の研究と教育に携わることになりました。

私は学部、大学院どちらも早稲田の文学部の出身で、京大とは全くご縁がなかったのですが、あえて言えば、京大の修士課程の入試を受けたことがあります。学部ではなんとなく英文科に進んだものの、文学を読んでいる時間より映画を見ている時間の方が長いことに気づき、大学院に進学して映画の研究をしたいと思うようになりました。そこで、日本で映画を専門的に研究できる大学を調べ（その数はとても少ないのですが）、同じ早稲田の文学部にある演劇映像コースと、京大の人間・環境学研究科を受験しました。京大の面接の際、指導教員として希望していた加藤幹郎先生に「君の筆記試験の解答は簡潔にまとまっているけれど、その分ちょっと物足りない」と言われ、必死に話そうとしたことを今でもよく覚えています（それに対する加藤先生の反応は、「へー、喋らせるとけっこう話すんだ、面白い」でした）。

結局、京大と早稲田の両方に合格し、私は早稲田の大学院に進学することを選びました。映画研究の環境など色々理由はありましたが、もともと自然豊かな茨城県の地元を離れ、無数の人々が行き交う都心の喧騒を求めて大学進学した身としては、京都の山と川に囲まれた落ち着いたある国立大学という場所に魅力を感じなかった、というのが正直なところ。よく考えると、私は自分の進路や専門を選ぶ際、いつも結局はなんとなく自分が惹かれる方を選んできました。さらに考えると、私はより歴史が浅く、軽薄で中身がない（よ

うに見える）ものに惹かれる傾向があるようです。文学よりも映画に、ヨーロッパよりもアメリカに興味を持ったのは、そのせいかもしれません。こうした選択が正しかったかどうかは分かりませんが、大学院時代にイェール大学に留学し、初めてアメリカの大学生活を体験してわくわくした時も、ポスドク時代になかなか就職が決まらず、非常勤講師として毎日違う大学で授業をこなしながら奮闘した時も、自分が好きでやっているのだからと納得することができました。とはいえ、その延長で京大とこのようなご縁があるとは夢にも思っていませんでした。自分の考える自己分析や将来像は大してあてにならないと反省しつつ、人環の一員に加わることができることを心から嬉しく思っております。

さて、ここで実際に京大に来てみてどうだったか、という印象を書くと大変収まりが良いのですが、残念ながら正直まだよく分かりません。ご承知の通り、コロナ禍で大学は全面的にオンライン授業となり、総人の学生どころか京大の学生自体まだほとんど見たことがないからです。私はこれまで戦前のアメリカ映画とラジオの関係について研究してきましたが、当時ラジオの普及によって新たに注目されるようになったのが「ライブ性」です。逆にラジオのようなメディアがなかった頃、人々は自分が見たり聞いたりしているものがライブかどうかを意識することはなかったのであり、「ライブ性」とはメディアの対極にあるものではなく、むしろメディアによって作り出されるものだと考えることができます。大学の授業も、「オンライン」の形式が出てきて初めて、「対面」が意識されるようになりました。私がこれからポスト・コロナにおいて見る京大は、単にコロナ以前に戻った京大でなく、「オンライン」の様々な経験を経て変化した京大であるはず。その時に、皆様と「対面」でお会いできるのを心待ちにしております。

(にいた ちえ)

新任の先生方より

没頭できる何かを



令和2年1月1日付で認知情報学系、認知・行動科学講座の講師として着任しました。京都大学での研究生活は約4年ぶり。吉田南構内を歩いていると、学生時代のことが色々と思い出されます。

私は、2007年に総人に入学し、その後、修士・博士課程を人環で過ごして、2016年3月に博士の学位を取得しました。総人への入学を志したのは高校2年生の頃、大学まで続けた陸上競技に取り組む中で生じた、自分の身体と運動について学びたいという純粋な想いからでした。(私の知る限りの)総人生の中では珍しく、明確な目的意識を持って入学しました。しかし、入学してみると選択できる授業は実に多彩で目移りしてしまい、真の関心について見失っていた時期もありました。よく言えば好奇心旺盛ですが、所謂新し物好き。中学高校時代の受験のための勉強の大きな反動で、テストや単位取得のための勉強となると途端に拒絶反応を示し、大学には毎日来ているが単位を取れない、とても真面目と言えるような学生ではありませんでした。唯一真摯に取り組んでいたことと言えば部活動で、学問への関心の先には必ず競技のためという考えがありました。

やりたいことがあって入学したものの、自分が求めている何かを探しあぐねていた私でしたが、恩師との出会いをきっかけに研究の世界に魅せられました。身体運動制御に関する学問領域で研究を遂行する中で、学問的問いを解決していく楽しさだけではなく、実験やデータ分析、論文執筆などの研究過程における小さな進歩にも達成感を得ることができ、研究活動の全てに没頭することができました。また、それは競技のための学びから解放されて、身体運動制御学そのものを純粋に味わうことができ、視界が広がった瞬間でもありま

萩生 翔大

(総合人間学部 認知情報学系)

人間・環境学研究科 共生人間学専攻)

した。入学時は研究者になることなど考えてもいませんでしたが、没頭できる何かに辿り着いた結果、それを生業にすることができました。もちろん、周囲の支えや環境に恵まれたお陰であり、今こうして再び京都大学で研究をする機会をもらったことに感謝しています。幼少時代、記憶している最初の将来の夢は、虫博士になることでした。研究対象が虫からヒトになったという違いはありますが、曲がり形にも将来の夢を叶えることができました。

先にも触れましたが、私の研究テーマはヒトの身体運動制御です。ヒトの身体は莫大な自由度を有しています。そのため、目の前のコップに手を伸ばすという動作1つをとっても、それを実現するための身体の動かし方は無数にあります。一方で、運動を実行する際は、必ず1つの運動を選択しなければなりません。20世紀半ばにBernsteinによって指摘されたこうした不良設定性の問題は、自由度問題と呼ばれており、私の身体運動に関する関心の根源です。その解決には、運動の基盤を扱う神経科学・生理学を始め、神経系の情報処理に関わる情報学、運動を記述するための数学や物理学、また行動選択に関わる心理学的な側面なども考慮する必要があり、極めて学際性の高い研究分野の1つです。総人・人環の特色を大いに活かせる研究テーマだと勝手に自負しております。

今、一歳半になる娘がいますが、底知れぬ好奇心と日に日に成長していく姿に驚かされています。自分はその頃と同じように研究に没頭し日々成長できているのかと、毎日考えさせられています。之を知る者は、之を好む者に如かず。之を好む者は、之を楽しむ者に如かず。学生の皆さんが没頭できる何かを見つけるためのきっかけの1つになれるよう、私自身初心に立ち返り、日々挑戦し続けていきたいと思っています。

(はぎお しょうた)

新任の先生方より

着任のご挨拶



2020年4月に岩手大学人文社会科学部より着任いたしました。出身は群馬県、学生時代は東京、その後は茨城県と岩手県におりましたので、これまでの人生を東日本で過ごしてきました。

研究分野は言語学で、ロシア語とラトビア語を主な対象とし、社会や文体、メディアとの関わりから文法や語彙などの言語現象を研究しています。ロシア語もラトビア語も、インド・ヨーロッパ語族の言語です。前者はスラヴ語派に属し、後者はバルト語派に属しています。かたや話者人口の多さや国際的通用度から“メジャー言語”であるロシア語（京都大学の初修外国語の中では“マイナー言語”かもしれませんが）。かたや話者人口が200万人ほどで、ヨーロッパの中では“マイナー言語”であるラトビア語。どちらもそれぞれに研究のしがいがあります。言語を勉強することで見えてくる世界観や、研究する面白さを学生に伝えることができればと思っております。

どの大学でも、教育・研究・学内行政といった大学教員の仕事自体に大きな違いはあまりないかと思いますが、新しい環境ゆえ、着任前にはこんな心配をしていました。私は方向音痴なもので、複雑なキャンパスの中で迷子にならずに自分の授業の教室までちゃんとたどり着いて、時間通りに授業を開始できるだろうか。また機械音痴でもあるため、授業中に手際よく視聴覚資料を見せるために、教室内の機器を使いこなせるだろうか。しかし授業のオンライン化により、授業は自宅の使い慣れたパソコンで行うことになり、こうした心配事は対面授業の再開時に持ち越されることにな

堀口 大樹

(総合人間学部 認知情報学系)

人間・環境学研究科 共生人間学専攻)

りました。

何かと大変なオンライン授業ではありますが、よい面もあります。例えば外国語の従来の授業では、履修者が多いと学生一人一人に対して時間を割くことは難しいです。しかしオンライン授業になってからは、文法説明の資料を事前配布して予習をしてもらい、Zoomの授業では履修者を10人程度のグループに分け、課題の確認や発音指導をしています。こうした反転型の授業を行うことで、短い時間ながらも集中した、少人数制のような授業を行えるようになりました。Zoom上の氏名アイコンのおかげで、学生の顔と名前は思ったよりも早く一致するようになりました。二次元の空間ながらも、授業の回を重ねるにつれ、個々の学生の様子も見えてくるようになりました。

しかしながら、オンライン授業の難しさも多々あります。学生の微妙な表情の変化も、画面越しには見えにくいものです。生身の人間との対面でのコミュニケーションが、知らず知らずのうちに自分の活力になることもあるかと思えます。従来の教室での学生との授業の前（中）後の雑談や、学内で先生方とお話をする機会もなかなかないため、ちょっとした“教員のキャンパスライフ”もお預けとなりました。

オンライン授業が今後の大学教育の授業形態の選択肢の一つとして残っていく可能性もありますが、やはり学生なき大学のキャンパスは寂しいものです。従来の大学生活が送れていない学生の大変さは計り知れません。大学のキャンパスに活気が戻ってくる日を待っています。

まだしばらくは直接皆様にお目にかかれる機会がなかなかございませんが、どうぞよろしく願いたします。

(ほりぐち だいき)

新任の先生方より

理論と実践の間で



2019年4月に国際高等教育院・附属国際学術言語教育センターの英語教育部門の教授として着任しました。本研究科（共生人間学専攻・外国語教育論講座・言語教育研究開発論分野）では2020年4月より協力教員としてお世話になっております。研究としては、哲学の枠組みを使って英語教育あるいは広く言語教育で使われている概念や行われている実践を分析しています。

出身は教育学部・教育学研究科系で、大学院の最初の2年半程度は、心理言語学を援用した研究を志したり、他研究科の先生が主催するチョムスキーの言語哲学の勉強会にも参加したりしていました。しかし、次第にその種の研究での問題空間設定と実践者の現実世界認識の違いが気になり始めました。そんな時に他研究科の別の先生の勉強会で学んだウィトゲンシュタイン哲学に惹かれ始め、英語教育といった多面的で複合的な現象は、自然科学的方法論で厳密に細分化するのではなく、哲学的探究で包括的かつ整合的に捉えるべきではないかと考えるようになりました。

同時に、多くの優れた現職教師に接するにつれ、私の中には実践知に対する畏敬の念が生まれてきました。哲学に造詣が深い演劇家の竹内敏晴はかつて次のように述べたそうです。「学者の先生方は形而上学的な観点から身体やことばについて語るけれども、それらは生の肉体やことばによる検証がなされていない。私はそういうものを信じないし、現場の実践をとおして試行錯誤しながら構築される理論でなければ、実際の役には立たない。

柳瀬 陽介

(人間・環境学研究科 共生人間学専攻/
国際高等教育院 附属国際学術言語教育センター)

そういう理論を既存の思想・哲学の理論と突き合わせながら、さらにシェイプ・アップしていく、私の方法はそういうものだ」(竹内敏晴 他 (2018) 『からだが生きる瞬間』藤原書店 p. 14)。この発言を知ったのは最近のことですが、現場に密着すべき分野を研究する私の中には昔からこのような発想があったようです。

そんな信念から、2019年に私は20年勤めた母校(広島大学教育学部・教育学研究科)での教師教育研究者という立場から、本学の国際高等教育院での英語教育の実践者という立場に身を転じました。これまでの研究から学んだ知を、自らの身で確かめ、発展させたく思ったのです。そして本研究科での協力教員という身分も頂き、省察的研究者としての自分と院生との対話(研究指導)が始まりました。

私が基盤としている哲学的枠組みには、分析哲学のデイヴィッドソン、政治哲学のアレント、社会哲学(理論社会学)のルーマン、あるいは神経哲学(神経科学)のダマシオやトノーニやバレットなどの枠組みもあります。また文化心理学のブルーナーの物語論や、当事者研究やオープンダイアログでの対話論も参考にしています。しかしどれにおいても、それを専門として研究していられる方からすれば、稚拙な理解しかしておりません。ですが、私の役割は、現実世界の英語教育(言語教育)をより豊かにするために、それらの理論知を実践知とつなぐことだと思っています。このように研究者としても実践者としても中途半端な自分ですが、これからも理論と実践の間でもがき続けようと思っています。ご指導ご鞭撻をどうぞよろしくおねがいします。

(やなせ ようすけ)

新任の先生方より

文献と地域社会から学ぶ

徳永 悠

(総合人間学部 文化環境学系／
人間・環境学研究科 共生文明学専攻／
地球環境学堂／地球益学廊)



2010年に京都大学大学院人間・環境学研究科修士課程に入学してから、ちょうど10年が経ちました。院生時代の研究室と今の研究室は吉田南総合館の同じ棟の同じ階にあり、ときどき廊下で

院生と立ち話をします。いつでも初心にかえることができる環境で仕事を始めることができました。

修士課程に入学するまでの4年間は朝日新聞社で記者として働きました。出自や文化、国籍などの異なる人びとがともに生きる社会の在り方について考えたいという思いから、日本で暮らす移民について積極的に取材しました。仕事は順調に進み、手ごたえを感じていましたが、新聞記者のままでは、移民の現状や歴史について専門性をつけることがとても難しいと判断し、大学院に進学しようと思いました。

修士課程では、歴史学者の林ブライアン先生の指導のもと、アメリカ移民史について研究を始めました。林先生と副査の前川玲子先生からは日々の勉強だけでなく、アメリカ留学に向けた準備においても多大なご支援を賜りました。また副査の大黒弘慈先生の授業では、アダム・スミスの『道徳感情論』を精読し、学術的な視野がぐっと広がりました。教員として人間・環境学研究科に着任し、お世話になった先生方や事務のみなさんに対して、感謝の気持ちを新たにしています。

修士課程入学後に始めたことで、今でも続けていることがあります。それは外国にルーツをもつ子どもたちへの学習支援ボランティア活動です。

滋賀県大津市で活動し、ブラジルやペルー、フィリピンなどにルーツを持つ小中高生の勉強をみて、生活や教育に関する保護者の相談にも関わっています。また、滋賀県国際協会が主催する進路ガイダンスや、小学校での二者面談に通訳として足を運ぶこともあります。最近では不就学の子どもたちが学校に行けるように教育委員会に働きかける取り組みも行いました。

記者時代に在日外国人について取材を重ねましたが、取材対象との関わり合いは一時的なものになりがちでした。学習支援活動を通して移民家庭と継続的に関わることで、各家庭の状況だけでなく、彼らが暮らす日本社会の課題や可能性についても理解が深まりました。自分の移民史研究と直接関係のある活動ではありませんが、こうして地域社会で移民家庭と関わり合うことで、人の移動に関する事象について過去と現在の類似点と相違点を認識でき、移民の歴史に対する洞察力も高まったと思います。学習支援活動とはいうものの、子どもたちや保護者のみなさんから学ぶことのほうが多いです。

京都大学の学生たちにも文献に基づいて考えて文章で説得する力を身に着けると同時に、自分の関心のある地域に足を運び、その地域の人々と関わり合う時間をもってほしいと思います。昨年度までは京都大学の文学部で英書講読の授業を担当していました。その授業を受講していた学部生の一人が、私の学習支援活動に関心をもち、今年からボランティアのリーダーをしてくれています。人間・環境学研究科と総合人間学部でも、学生とともに文献と地域社会の両方から学びながら、教員としての努力を続けていきたいと思っています。

(とくなが ゆう)

新任の先生方より

めぐりめぐって、帰る



2020年4月に富山大学人文学部から着任しました。日本中世史、なかでも鎌倉幕府と荘園・村落を専門にしています。

1992年4月に京都大学文学部に入学してまもなく、まだA号館とよばれていた吉田南総合館で、教養部の上横手雅敬先生（現名誉教授）の講義「国史学Ⅰ」に出会い、感銘を受けました。

もともと東洋古代史を研究したかったのですが、高校の先生に聞いてもよく分からず、でもそれならば京大にいけ、といわれて入学したはずが、上横手先生の講義で一変します。高校で日本史を履修していないにもかかわらず、無謀にも日本中世史の研究を志しました。

とはいうものの、学部生のころは、やはりA号館の近くで学問以外のことに熱中しており、なんとか荘園関係で卒業論文を書いて、1996年4月に大学院文学研究科修士課程に進みました。出来のほどはご想像のとおりで、これに続く研究と教育の前半生も紆余曲折を経ることになります。

鎌倉幕府の御家人制を主題とする修士論文では、つまずきました。1998年4月からの博士後期課程では、守護の再検討に取り組むものの、滞ります。有象無象の御家人や、全国68カ国、68通りの守護を、いきなり理解しようとするのは、早計でした。

そうしたなか、鎌倉幕府の西国支配を管轄する京都の六波羅に逢着します。単一でとらえやすく、発展性がある反面、未解明の部分も多い研究対象

熊谷 隆之

（総合人間学部 国際文明学系／

人間・環境学研究科 共生文明学専攻）

をえて、2004年7月に学位論文『六波羅探題の研究』で博士（文学）を取得しました。

2004年4月には、日本学術振興会特別研究員（PD）となります。受け入れ教員は、上横手先生の後任でもある大学院人間・環境学研究科の元木泰雄先生（現名誉教授）でした。元木先生には、ご本人はもちろん、薫陶をうけた現在の大学院生とのやりとりをつうじて、研究・教育者としてあるべき姿を学ばせていただいています。

2005年4月には、上横手先生が関西の若手に声をかけ、月に1度、総合人間学部棟などで、研究発表と討論をおこなう「鎌倉時代研究会」が発足しました。とっておきを披露して、「研究会をはじめ、はじめてよかったと思いました」とのお言葉をいただいたのは、ひそかな自慢です。

そして、2007年までに、研究対象を西国から全国に広げました。その結果、鎌倉幕府の列島支配は、東国では守護不設置を基調とし、守護よりも、むしろ関東・六波羅・博多のもとで、複線的になされていたとする独自の理解を提示するにいたります。荘園、御家人制、守護、六波羅、守護、と「めぐりめぐって、帰る」うちに、それらの各論を鎌倉幕府論に高めることをえました。

2009年4月に富山へ赴任する際、上横手先生が送宴を催してくださったことを思い出します。上横手先生から元木先生へとうけつがれた研究室に、おおけなくも、「めぐりめぐって、帰る」ことができるとは、思ってもいませんでした。

研究と教育の後半生も、うけつがれた学問の重みをうけとめながら、次なる段階をめざすことができると考えています。

（くまがい たかゆき）

新任の先生方より

京大を再読する



学生時代以来の京都、そして京大は、懐かしいというよりむしろ新鮮である。教わる立場から教える立場へ。拠点は本部キャンパス（文学部）から吉田南キャンパス（総合人間学部）へ。住む場所は洛東から洛西へ。おまけにコロナ禍で対面授業から遠隔授業へ。なじみの場所であっても、昔とは少し違う立場・環境にいるせいか、すべてが異化されて見える。

ともあれ、これは、同じ本でも時間をおいて読めば、まったく違う側面が見えてくると似ているかもしれない。再読であっても、内容をきれいさっぱり忘れていて、初読とはほぼ同じ経験になりかねないこともある。が、大体は読みながら徐々に思い出し、同時に、印象の変化が自分の変化と同期していることにも気づく。

このように読書をはじめとした芸術体験というのは、「非」再現性の場であるわけだが、そこで思い出すのが、自分の入学時に配布された学部案内冊子の、新入生向けの巻頭言である。その中で、当時の学部長の先生は、もう一度『ハムレット』を「初めて」読むことができるならどんなにいいだろう、と未読者を心底羨むシェイクスピア研究者に大いに共感を寄せながら、何も知らないということは実は貴重なことでもあるのだ、とおっしゃっていた。今でも覚えているのはおそらく、自分がまさしく「何も知らない」ことを自覚させられるきっかけとなったからだろう。アルファ

ベットの文字列を眺めていることが好きで、こういうことばかりできそうな世界に身を置きたい、という気持ちがあっただけの井の中の蛙は、こうして京大という大海（樹海？）に放たれた。専攻した英文学の勉強を通して、英語や日本語の多様な姿を知り、言葉へのメタ意識、という大げさだが、要は言葉・声を「着せ替え」する面白さに目覚めた（その副産物として、カラオケやモノマネという余技も会得した）。また、何も知らない人間は身の程知らずの蛮勇を振るうことができるので、ジェイムズ・ジョイスの『ユリシーズ』なる、めくるめく言葉の着せ替えから成るテキストを相手に卒論を書くことにした（「十五で嫁に行くようなもの」との指導教員からの警告をものともせず）。当たり前だが、研究においては、何も知らないことはいいことではないし、そればかりか、何かをちゃんと知ることは一筋縄にはいかない、ということも痛感させられることになった。何かを知ったところで、でもちゃんとわかっていないんじゃないか、という不安が常につきまとう。その心性こそが、京大で授けられた最大の薫陶（トラウマ？）だと思っている。

ユリシーズ＝オデュッセウスよろしく、10年ならぬ15年の「放浪」の末に戻ってきた「故郷」は、『ユリシーズ』第13挿話中の言葉を借りれば、“Returning not the same.”を体現した格好である。昔読んだ本を再び読み直すような気持ちで、この懐かしくも新しい場所を、もっとちゃんと知っていききたい。

（ごうだ みちよ）

新任の先生方より

あみめ



新型コロナウイルス騒ぎの最中、2020年4月1日付けで、歴史文化社会論講座の博物館文化財学を担当すべく准教授として着任しました。本業は、京都国立博物館の연구원です。

私は、この講座の前身となる講座の学生でした。高校から修士課程までを私立の国際基督教大学で過ごしてから参りましたので、国立大学の佇まいや事務手続きがとても役所らしいことに感心しました。何度も書かなければならなかった「文化・地域環境学専攻、環境保全発展論講座、生活造形分析論」の文字列を今でも呪文のように覚えています。研究や人生をあみものに喩えるなら、あの頃はあみはじめ。今みると、不揃いながら大切なあみめが並んでいます。

国際基督教大学でお世話になったリチャード・ウィルソン先生は「工芸研究はモノを見よ。日本では大学院生が国立博物館の収蔵品を学べる場所は一つだけ。最近できた京大と京博の協力講座を目指なさい」と奨めて下さいました。木製品に興味のあった私は、当時の人環で漆工芸を教えていらした灰野昭郎先生に、ウィルソン先生の推薦状つきのお手紙を差し上げ、自分の興味関心を述べて受験の可否をお尋ねしました。折しも灰野先生は一世一代の大展覧会「蒔絵—漆黒と黄金の日本美」を準備中。お返事には、今はとても会う暇はないが、展覧会に日本中の名品が集まるから、そこで研究対象を考えてはと、内覧会の招待状を添えて下さいました。特別展の開幕を迎えて晴れやかな笑顔をとたえた灰野先生にお目にかかり、蒔絵の名品であふれた展示室をじっくりと見学させていただきました。受験してもよいことになり、講座の他の先生方の専門も調べて試験勉強に励み、山勘も見事に的中、無事に合格を果たしました。

博物館の授業は、教科書に載るような国宝を含め、

永島 明子

(人間・環境学研究科 共生文明学専攻／
京都国立博物館)

実物を調査室に出して観察するというものでした。今思えば、作品の安全に責任を負うこともなく、先生に質問ができ、ガラスを隔てずにずっと作品をみつめていられるという夢のような時間でした。古文書、染織、彫刻、近世絵画、中国絵画の先生が、そのときどきのご自身の仕事に合わせたりもしながら、作品を見せて下さいました。また、博物館の業務である社寺調査も手伝わせて下さいました。調査地での立ち居振る舞いや、各分野の作品の扱い方、調書の取り方や撮影の方法を学ぶ絶好の機会でした。

私はふたつめの修論のテーマを、灰野先生の蒔絵展で出会ったマリー・アントワネットのコレクションに決めました。フランスからの出品もあり、幼少期をかかの地で過ごした私の心に響きました。なぜ、アントワネットが日本の蒔絵を？と会場で感じた疑問をもとに、フランスの国立公文書館や国立東洋美術館、ルーヴルやヴェルサイユ宮殿へ調査に赴き、90点近く伝わるコレクションの全貌を捉え、歴史的な位置づけを行いました。作品調査ができるようになっていたのは、人環での訓練の賜でした。この論文のおかげで博物館に就職もできました。その後も、作品を前にして思い浮かぶ疑問やアイデアを論証しながら漆器を研究し、2008年には世界13カ国から作品をお借りした特別展「japan 蒔絵—宮殿を飾る東洋の燦めき」を組み上げました。大変残念だったのは、その開幕直前に灰野先生が亡くなられ、展示をご覧いただけなかったことです。2012年には、人環で日欧知識交流史を教えていらした松田清先生の下で、輸出漆器に関する博士論文を認めていただきました。

人々の暮らしの歴史は長大で、出たところ勝負の私の人生は瞬く間に過ぎて行きます。残り時間でどれだけのことのできるだろうと思うようにもなりましたが、人生100年ならまだまだ道半ば。人でも物でも目前の出会いを大切にしながら、あみものを続けるように研究を形にして行きたいと思っています。

(ながしま めいこ)

新任の先生方より

中途半端の先へ



着任早々オンラインな世の中、皆さんと直接顔を合わせてお話する機会に恵まれず半年が過ぎ、今ここで「中途半端」な文章を書いています。生まれも育ちも北海道の私は、もとより京都の地には縁もゆかりもありません。一方で高校時代から

京都の「はんなり感」にほのかな憧れを抱いておりまして、多くの寄り道をしながら、期せずしてこの地に辿り着くことになりました。

3月までは茨城工業高等専門学校で教員をしておりまして。いわゆる「高専」として知られる高等教育機関の1つとして、ロボコンで御存知の方もいらっしゃるかと。高校と大学が融合したような特殊な環境。授業だけではなく、クラス担任や部活の引率、悩み相談まで、本当に「高校の先生のお仕事」を主務としていました。一方で、高等教育機関ですので研究もまた重要な業務です。卒論指導や自分の研究、共同研究の受入や研究資金の獲得など、ラボ運営に奔走する日々。教育と研究、そこに全人教育が表裏一体で存在する場所でした。高専に至るまでの私自身が経てきた道も紆余曲折ありまして、建築系を志して大学に進んだものの、フィールドワークに魅力を感じて地質学分野へと方向転換。学生時代は地質調査と古生物学を専門とし、博物館勤務を経た後、今度は意図せず地球化学の道へ。そしていつのまにか分析技術開発を追究することになりました。

さて、そんな私の研究ですが、現在は安定同位体比分析の技術開発を進め、その応用研究を通じて世界最高レベルの環境解析を実現しております。この分析技術は当初地球科学分野での活用を想定していたのですが、水産分野でのニーズが急増し、最近では「魚類の生き様を知る」研究がメインです。回遊魚は大海を数千キロも回遊しながら故郷に帰り、そこで卵を産みまた旅に出ます。こ

石村 豊穂

(総合人間学部 自然科学系)

人間・環境学研究科 相関環境学専攻)

の回遊の履歴は実はほとんどわかっていないそうです。それゆえ魚類を保全しようにも、その方策を定めることに困難が生じています。一方で、魚類の頭部に「耳石」という炭酸カルシウムの鉱組織があります。この耳石中の酸素同位体比を分析すると、泳いでいた場所を推定することができるのです。ただし極微量での分析が必要なためその実現は不可能でした。これを可能にしたものが私の分析技術でして、魚を守る！お寿司を守る！文化を伝承！と考えると、自ずとやる気に溢れてくる感があります(古生物学への応用研究も継続しています)。

出会いのままに寄り道もしながら今を歩み続けているわけで、専門は何？と問われるといつも困惑です。そんな「中途半端」な道について、お風呂につかりながら考えたことがありました。「昔何やっても中途半端と言われたことがあったな〜」と。確かにそうだったし、今もそうなのかも。仕事も常に境界領域に生きていますし.. さらにぼーっとしながら、「この際、中途半端を極めるのもありかな・・・」と... でも「中途半端を極める」ってどういうこと？と思いググってみたら山ほど出てきました。ある意味日本文化の一つなのかもしれません。思いついたのは「粋な中途半端」「爽やかな中途半端」「中途半端の王道」... でも、王道もダメ。極めるのもダメです。中途半端じゃなくなっちゃうから。結局答えは出ずで..

前任校の高専は、高校や大学よりも学生との距離が近く、喜怒哀楽の学生との関わりの中で「人」について知り、「人の不思議」について学び.. それによって形作られた今の自分がいます。人間・環境学研究科に着任し、多様性を育む雰囲気のもと、新たな研究成果や学生・教職員の皆さんとの出会いの中で、何を感じ、何を得ていくのか。そこに期待を抱きつつ、皆さんと一緒にたくさんの寄り道をしながら「中途半端」の先を見て行きたいと思っています。

(いしむら とよほ)

総人環

編集後記

◆『総人・人環広報』第65号をお届けいたします。今号には、新しくお迎えした9名の先生方からのメッセージを掲載しました。生憎の新型コロナウイルス感染症の流行という特異な状況の下で、新たな仕事場に足を踏み入れるにはいろいろと不都合を感じられたのではないかと拝察いたします。そんな

不都合をものともせず教育と研究に邁進される新任の先生方の、熱意あふれるメッセージを是非ご一読ください。そのほか、令和元年度総合人間学部卒業論文・卒業研究題目一覧を掲載しました。総合人間学部及び人間・環境学研究科で行われている研究をそこに垣間見ることができると思います。特に、いずれ卒業論文・卒業研究に向き合うことになる学部生の皆さんのご参考になれば幸いです。

(A・T)

総合人間学部
人間・環境学研究科

広報委員会